【概要】

本研究では農業空間の組織化の視点から富山県入善町のジャンボスイカ産地の変遷を明らかにすることを目的とした．入善町は大正期にスイカの大産地として名声を高めた．しかし高度経済成長期頃に生産が急激に減少する．この状況を打破する次の段階として「入善町黒部西瓜生産組合」を設立した．生産農家に合わせた品種改良を重ね，味や匂いが良く，糖度の高い品種を導入へ取り組んだ．また現在も組合は圃場巡回や品質査定会を通して品質の維持，向上を目指している．多くの産地が生産する丸玉スイカと形状も大きさも違うことに加え，高品質なスイカで差別化を図ったことは産地の存続に大きく繋がったと考えられる．さらに農協を介した共販体制が行われたことで，安定した出荷が可能となった．このようにジャンボスイカ産地は農家レベルでのジャンボスイカの導入，農家集団として組合の設立，農協を介した共販体制の確立という組織化によって存続を図ってきた．それでも近年は生産農家数の減少に伴い，作付面積が縮小し，衰退の一途をたどっている．その理由としては，個人農家は高齢化と担い手不足，法人農家は耕作放棄地の増加によるスイカ生産の縮小が挙げられる．そういった問題を解決するためには入善町のみな穂農協の関わりが必要不可欠となっていくと考えられる．